

我が中国戦線記

江橋 榮
中野二丁目

戦線に入る前に私の軍歴をちよつと書いてみます。

私は昭和十三年三月に学校を卒業して就職し、台湾に赴任しましたが、その年の十一月に召集令状が来て東京に戻り、十二月一日二等兵として千葉県習志野の騎兵第十五連隊三笠宮隊に入隊しました。立派な兵隊になるようにと色々鍛えられましたが、二人の上官の言葉を今でも覚えています。

一つは「何故、銃や剣等の兵器をはじめとして軍隊で支給されるものを大切にしなければならぬか、それはこれらが皆国民の税金で作られているからだ」。よく聞く言葉は、兵器等はすべて天皇陛下から賜ったものだから大切にしろというのが普通の説明ですが、此の若い軍曹の班長は、よくぞ税金と言ったものだとは今でも感心しています。

もう一つは大隊本部付の准尉が言った言葉で、「何かの行事で朝の七時に集合が命ぜられた時には、必ず一時間前に行つて準備をして兵隊達が来るのを待つてやるのだ」というものです。又もう一つ、私の感激したのは、やはり三笠宮が中隊長でおら

れたので、時々精神訓話をされましたが、今でもそのきびきびした勇姿は頭に残つていて、馬場でスペイン並足などやっておられるそのお上手なことに感心していたのであります。

翌十四年六月には経理部甲種幹部候補生に合格して若松町の陸軍経理学校に入学し、十五年四月に卒業。満州国新京の関東軍野戦貨物廠に配属されて全満将兵の給与関係業務を行うことになりました。階級は陸軍主計中尉に昇進しましたが、昭和十八年十二月に召集解除となり東京の自宅へ帰還し、正月からはまた元の会社の東京支社の仕事に戻りました。

風雲急を告げる十九年七月、再び召集令状を受け取り、山形の歩兵連隊に入隊しましたが、直ちに弾一二〇一八部隊に編成されて出征することに決まりました。

十一月に入り国防婦人会等の見送りを受けて出発しましたが、どこへ行くのかは秘密で、駅を通過する際は汽車の窓は閉められ、下関に着いて初めてどこへ来たかがわかりました。

汽船に乗つて、赤いフンドシが全員に支給されましたが、こ

れは船が沈没して鮫に襲われない用心のためにつけるのだということがわかりました。前に出発した輸送船が敵の潜水艦の攻撃を受けて沈没したということ聞かされて、いよいよ戦争という実感が起こってきました。無事に韓国の釜山に上陸した我々は、貨車に乗り、北進して満州国の奉天へ到着し、すぐに南下して中国との国境山海関を過ぎましたが、冬季の貨車の中なので、折り重なって暖をとる、停車場に着くと、兵隊と一緒に買ってマントウ（ふかしてあるマンジュウ）の熱いのと南京豆を買ってむさぼりながら、これから先どこへ行くのだろうと不安と焦躁にかられていました。

汽車が新郷の街に到着した時には早速アメリカの飛行機に攻撃され、汽車のボイラーに穴を開けられて、ウイスキーの大きな樽からシュウシュウと湯が漏れ出るようになってしまったのです。幸いに我々は、兵隊もろとも壕に避難して無事でありました。ところが、この駐屯部隊の衛兵が機関銃を掃射して勇敢に敵機に立ち向かったのですが、みるみるうちに二機中の一機が黒煙を吐き、長い尾を引いて彼方の山間に墜落して行きませんでした。「一階級特進だ」「金鶏勳章だ」と一同がその勇敢な兵士を褒めました。これが敵機とのすばらしい出会いでした。

しかし、敵の制空圏に入ったので汽車に乗るのは危険だと、夜行軍で前進することになりました。雪解けの道を、犬の遠吠えを聞きながら歩いたため、大隊の三分の一が凍傷に罹って残

留しなければならぬということが起り、主計がもつと靴下のよいのを配給しないからいけないのだと、無理難題が私の所へ来ました。この近くに補給する兵站や貨物廠が無かったからであります。

私達第三大隊はようやく大都会漢口に到着しましたが、日本人租界は空爆を受けて見る影もありません。そのかわりに我々は悠久の流れの楊子江を眼前に見て、中国の長い何千年かの歴史がこの流れに反映しているのであろうなどと思いつながら、空襲も受けないで船で河を渡り対岸の武昌へ着きました。

武昌からは経理室勤務の我々が行軍で先発し、目的地で部隊の宿営家屋を選んで、夜行軍をして到着した部隊を迎えて宿泊先を割り当て、又先発するという全く忙しい行動をとったのです。

私は戦後、弾一二〇一八部隊の史蹟編纂のために防衛庁に呼ばれた時、私達ほど遠距離の行軍をした部隊は日本戦史に他に無いと聞かされましたが、この足がよく潤滑油も無くて今でも動いていることを不思議に思う位歩いたのです。

やっと岳州へ到着した時、連隊本部付の高級主計が転勤されたので、私とその職を拝命しました。この為私には内地から連れて来た乗馬が与えられました。「東光」という名のアラブ系のきやしやな馬でした。

ある日、部隊より先発して、通信隊長の率いる行李（注・輸

送班)の一個分隊(十名)と、駄馬十頭と共に次の宿营地長沙に向かいました。長沙の少し手前の山の上で昼食をとっていましたが、長沙の上空を飛んで爆撃をしていた玩具のように小さな飛行機が機首をこちらに向けたように思うと、アツという間に上空に飛んで来ました。壕を探し、まもなく、山際の畔のよな所に伏せて観念していました。ところが頭や肩の上に葉莖が落ちて来たのです。一瞬やられたと思いましたが、弾丸ではないのでホッと一息つきました。十回程往復して掃射し、最後に小さな爆弾を投げて引き揚げて行きました。二機共アメリカの兵隊で、白いマフラーを巻いているのがよく見えました。「皆大丈夫か?」と通信隊長の声でみんな起き上がって来ました。無事でよかったと馬の方を見た時、皆青くなりました。山の上で休んでいた通信隊長の乗馬も、私の乗馬も、行李の馬も、全部が首や腹や股を銃撃されて戦死していたのです。その上これらを守っていた通信隊長の当番兵が頭を撃ち抜かれて名譽の戦死をとげていたのです。

直ちに引き返して部隊長に報告して、私達の不注意をお詫びしました。もう少し早く避難させていればこんなことにならなかったと悔やまれたのです。部隊は交替で穴を掘り、戦死した馬を葬りました。又、当番兵は火葬にしました。集められた木に火がつけられ、悲壮なる葬送のラッパの音が我々の魂を削るように夜の寒気と共にひしひしと胸に迫って来ました。

私達の部隊は長沙を過ぎて少し先の湘潭しやうたんという街に着きました。珍しく岩塩のとれる所で、中国では牛一頭を買うのに塩一升で足りるといわれるくらい塩は貴重品でありました。

湘潭の少し先の清泉郷という村へ参りましたが、ここではしばらく次の前進命令まで逗留することになり、連隊本部は村長の家に厄介になりました。若い女性二人がいて、その一人には小さな子供もいて、皆親切にしてくれました。しかし親日家の村長であった為、敗戦後は共産軍に占領されて射殺されたという話を聞きました。残念に思っています。

湘潭を過ぎると、我々に食物等を配給する兵站がなくなり、徵発命令が下りました。徵発は紙切れ一枚置いて盗とつて来ることなのです。部隊は何班かに分かれて集落を襲い、米、油、野菜などを徵発して来るのです。勝っている日本軍がこのようなことをするのはおかしいと思いました。しかし実際は日本軍は降伏の一步手前にあつたのです。

徵発につきものの殺人等はあまり聞きませんでした。集落に男性は見当たらず、たまたま老母と赤ん坊とが残っていた所がありました。日本軍は女子供に害を加えないと思っていたとすれば日本軍は褒められると思います。

ある日、牛を徵発して来た後に老婆がついて来て、牛だけは持って行かないでくれ、日本の兵隊はそんなことをしないはずだ、私は日本を知っていると涙を流して嘆願するので、私は兵

隊に牛は置いて行けと命じて納得させたこともありませう。

湘潭を過ぎるともう敵地ということがひしひしと身に迫って来ました。河岸を天秤で荷をかついで行く中国人の十人程の群れに会ったので、止まれと叫んで分隊長が追いかけると、対岸から一斉射撃を受けました。部隊が一時は動けなくなりましたが、匍匐前進をして建物の陰まで進みました。前に行く兵隊の足元へ敵の弾丸が砂煙をたてて飛んで来ましたが、皆無事でした。

連隊本部の我々は、巨口舗きくこうほという所へ進んだ時に敵の迫撃砲の弾丸が飛んで来ました。連隊本部の下士官が負傷しました。私は後の弾丸の届かない山に上って双眼鏡で見ますと、白い軍服を着たアメリカの将校が指揮棒を振りまわしているのを見ました。我々の敵は中国ではなくアメリカなんだとつくづくこの時感じました。

先発した第一大隊では続々と負傷兵が後退して来ました。第三大隊では中隊長が、第二大隊では軍医大尉が戦死するという事態になってしまいました。

我々の攻撃目標はもう少し先の飛行場芷江しきやうだったので、ここも攻撃出来なくなりました。それは敵の防禦のためもありますが、我々の部隊に転進命令が下ったからなのです。しかし既にドイツの降伏、ヒットラーの自殺を敵機からまかれた宣伝ビラで薄々知っていました。これらは敵の謀略かもしれぬと半

信半疑ですが、何故満州へ行かなければならないかは全くわかりませんでした。

さて翌年の六月六日、内地の博多に帰還するまでにはまだ色々な思い出があります。

敗戦の知らせが通信隊長から伝えられた時には、転勤する連隊長の送別会の帰りで、将校一同馬賊になるか、切腹するか、反撃するかなどと物騒な意見が多かったのですが、連隊長が次の指令を待とうと言われたので、皆大声をあげて泣きましたが納得しました。

私達は、蒋介石總統の「仇に報ゆるに恩を以てせよ」という有り難い言葉を忘れられません。

捕虜管理所の我々に対する態度も立派でした。決して敗戦軍人を侮辱するようなことはありませんでした。敗戦の軍人も又問題を起こすようなことはしませんでした。

騎兵隊長が指揮者となって舞台を作り、バイオリン、ギター、アコーデオンなど作って兵隊を慰めたのは村人達の好評を受け、何回もやりました。

もっともって書いて戦争とは何かを反省したいのですが、紙面の都合上これで終ります。